

川柳句集

光背

香川醉々





川柳句集

光背

香川醉々

川
柳
塔
社



序
文

西尾
葉

この句集が、遺句集になったことは、洵に残念である。

思えば、酔々君は天才であった。昭和四十二年病を得て、羽曳野病院に入院した。そして川柳を知った。昭和五十八年九月三日脳閉塞を患って意識不明のまま九月二十四日、あの世へと旅立たれたが、僅か十六年の間に、川柳をマスターされて、個性豊かな、酔々調なる境地を開拓された明晰なる頭脳は正に天才であった。ここに昭和五十八年十二月五日発行の菜の花句会報がある。西山幸さんが「悼酔々さん」という一文を書いておられる。借文すると「川柳は人間を掘り下げ、追求することは勿論だが、川柳は詩であるから同じことを言うなら美しい言葉をつかいたい。そして個性豊かな自分の句を作れ。本社会ははじめ各地の大会で入選した句でも（あれば君らしくない）沢山抜ける句よりも、自分の句を、いつも注意されるのが常だった」と述懐されている。このように彼は、既に自信を以て、人を指導する力を持ち、一見識をもっていた。明晰な頭脳は、九州帝国大学を卒業されて、学習書出版社に職を得、桃山大学の講

師として活躍されていたが、川柳塔社の編集部のスタッフとなつてからは、出版社の経験を生かして、

一本の味校了と書いたゲラ

の句の如く校正、展望欄に腕を振るわれた。

起きて酒また起きて酒三ヶ日

辛口の味も家系と共にあり

酔々君は柳号の如く、酒は大好きであつた。この酒が命とりになつたのである。

子供さんが無かつたから淋しかったのであろう。犬五匹に猫が十匹とか飼っていた。

残菊と飯粒残る犬の皿

牛乳で育つた猫も爪を磨ぎ

船頭小唄にすこし傾く犬の首

彼は又朱雀と号して俳句をよくした。

梅咲いて紀州の海は陽をはじき

悠久の歴史を見たり山焼く火

徳利のゴボゴボゴボと秋の音

こおろぎのシュプレヒコール造成地

季語をうまく入れて、川柳にしている腕も確かだ。

この句集は彼の死の直前に九分九厘まで、出来ていた。それで、

ゲラ刷を棺の中に入れられた。ユックリと校正していることだろう。

ここに不思議なことがある。彼の最後になった十月号の編集後記

に、般若心経のことを詳細に書いている。

苔青く梵の一字があれば足る

峰一つ越えて仏の声を聞く

等の淋しい句が見える。そしてこの句集の題も佛さんの後ろに燦然と輝やく、光背という名である。何となく自分の死を察知していた

ようであるのも哀しい。

最後に

哲学がぎっしりつまるベレー帽

彼は常にベレー帽を愛用していた。

天才がひっそり死んだ町という

彼の告別式のあったのは、奈良県の上牧町というひっそりした町であった。

句集、光背の中の目次は

一、女人高野、二、蛇皮線、三、催馬楽、四、獅子舞、五、修羅出土、六、群作品集という、ユニークなものである。

是非この一本を座右に於て、酔々句の真髄を鑑賞、勉強されんことをせつに祈る次第である。

昭和五十八年師走十日

水鶏庵にて

西尾 稔 識

。。。 群 作 品 集 。。。

跋

.....
塩 満 敏

288

大阪風景 (1)
(2)

284

木次よいこい

282

きつね雨ふあんたじあ

280

苔の花

278

ヒロシマ8月6日以後

272

大和風物誌 (1)、(2)、(3)

266

河内ずまい (1)、(2)

262

河内風景

260

高野山景

258

木曾山中

256

閑谷曇

254

装幀・見返し

西川景子

編集レイアウト

香川酔々

編集アシスタント

土田欣之

編集

塩満敏

I 女人高野

(昭和43年～46年)



宣伝戦 電波は空で擦れ違い

得意先 電話に頭下げている

ソ連・チエコスロバキアに侵入

静寂な抵抗 軍靴に立ち向かい

鬼ごっこ　やがて宇宙が狭くなり

サービス料分かったようで分からない

旧姓を書いた歳暮がつつましい

ひとりごと　心の奥がひよいと出る

口よりも眼で叱られて身に応え

病室の友が減るたび気があせり

湯たんぽのパッキンかえて冬支度

句帳おく白紙のまままで枕もと

二枚舌ぐらいで議員つとまらず

宝
石
は
心
の
奥
で
光
る
も
の

石
蹴
り
で
遊
ん
だ
道
も
舗
装
さ
れ

誤
字
当
て
字
耳
学
問
の
底
が
割
れ

花の咲く季節もあると言ひ含め

号数でニュースの価値は表わされ

弁当につつまこまれた妻の味

山門が葦酒を許す花の寺

退院のO・K顔がゆるんでき

元日のマンホールから人が出る

立志伝泣き言などは見当たらず

氷屋が氷を嚙んでいる残暑

風船が風に揺れてる肩車

老獺な返事社長の聞いておく

サングラスの中に女の齡があり

瓦斯つけて男やもめの茹たまご

また一つ山が消えゆく発破音

退院の日は赤飯と母が待ち

懐かしい下駄で故郷の土を踏み

この土地がわが一族の血を伝え

勲八等貫つて兵は土になり

渋柿の味ライバルは栄転し

札束を数え経済学無用

首輪のない犬に時雨が容赦せず

一本の味校了と書いたゲラ

税金の行方はいずこ泥の道

木枯しに押されて帰る家があり

日本人という喜びの餅を焼く

人間の業苦はる風関知せず

結婚をして遠のいた喫茶店

学園紛争続発

残り火をかかえ授業を再会し

倒産は分からなかった生き字引

値の高い方を薬局説明し

残菊と飯粒残る犬の皿

乗車券 一枚だけの乗車券

良心の痛み二日もあれば消え

寝不足を宿直室で取り戻し

湖に向かつて蝶の身拵え

鈍才も秀才もない恩師の目

出張を忘れて踊る阿波おどり

水平線

その向うから秋が来る

教え子とやっと分かった娘の会釈

古里のイメージ海はいつも青

有難う　　言ったらどうだ販売機

周囲みなつぶして酒豪の名に恥じず

大仏の貫禄そこに歴史あり

原稿紙一字も書いてない昼寝

淀川を渡って旅の恋を捨て

恩讐を越えて帰ってきた遺品

手間かけた味が乗ってる柿右衛門

理路整然ちびっ子ボスの名に恥じず

よそ目には平穩無事の灯りつく

蜜柑剥くやつと自分を取り戻し

強情が心の中で手を合わせ

みそ汁の匂い 座禅の鼻をつき

こおろぎのシユプレヒコール造成地

曲線の日本 台風引っかける

簡単な祝辞にこもる友の情

揉めているところへ来た猫叩かれる

句集との対話も楽し独り酌む

一プラス一が二でない知恵を寄せ

真っ赤かあの闇市で見たりんご

カドミウム汚染見つめている案山子

初日の出 信心でない手を合わせ

ジャンプしたところにあつた水たまり

歯車と思えば腹も立たぬ日々

おぼろ月われ斥候に出た記憶

渡り鳥小さな愛に見送られ

起きて酒また起きて酒三日

陸橋のリズム商都が動きだす

アジビラのひとり興奮赤い文字

翮雲 エンゲル係数忘れかけ

エンゲル係数||家計の総計に対する食費の割合。
それが高いほど生活水準は低くなる。

目覚しの代わりに鴉の鳴く故郷

当たり前のような平和に兵の墓

甘言に柿のたわわな村を捨て

銀狐
笑い
忘れた
首に
巻き

一本のマッチが愛を過去にする

存分に降った夕ゆ立だちに心満ち

鈍行の時刻表繰るマイペース

美しい自然がひそむ種袋

食欲は満ちた女のコンパクト

海の蒼さに染まりくらげの持つ自由

放浪記
飯場移転の準備する

冷凍魚
静かに海の夢を見る

青春は確かにあったわがノート

屑籠がすぐいっぱいになる焦り

名人の命で睨む仁王の目

遠出した草の匂いを持ち帰り

小銭入れはたいてこけし連れ帰る

室生寺
女人高野 塔も女人の性を持つ

人間の壁をはずそう大ジヨッキ

江田島の海に青春置いて来た

土匂う記憶の中のわらべ唄

ユーモアのかけらも乗せてないラッシュユ

猫の耳ぴくりと動く花鋏

女手で守る小島は坂ばかり

欲ためて溜めて金庫の艶が出る

哲学がぎっしりつまるベレー帽

石神と遊び呆けている
蜥と 蜴かげ

夕焼けて蟹の背中も夕焼ける

蔵書印さびし他人の手に渡り

青春をぶつけて確保する王座

豊年の表情おかめ鈴を振る

徳利のゴボゴボゴボと秋の音

生活のすき間を埋めに來る雀

夢で見た母と確かに手をつなぎ

左さ義ぎ長ちやうの地面叩いた日が恋し

左義長二小正月に行われる悪魔はらいの行事。

その人の汚点を語らないなさけ

民衆応神陵の力だ
前方後円墳

世渡りのにぎりこぶしは胸の奥

意味もなくマッチを灯す物思い

予報にはない天気図に虹かかる

幻邪馬台国の国論争にあるロマン

白鳳の滴りつづき岩座る

番号で呼ばれた胸へ聴診器

出稼ぎの父は帰らず屋根の雪

古代史の謎を埴輪の目が語る

日本の薄になつて基地還る

数学にない数式のある世間

寒風が抜けてもここは僕の城

昨日から姓が変わったおみおつけ

アルミ貨が気長に拾う人を待ち

雑踏を抜けて淑女の顔になり

蝶が飛び空っぽの空蘇り

日記帳余白埋めて
いる枯葉

雪嶺に囲まれ男
のいない村

心から笑える
人と鍋囲み

見切り品師走の風の当たるところ

見送りの三振に似た年が暮れ

札束の指紋はみんな人のもの

マリアにも似た手で牛の乳絞る

腕時計見てから男演技する

シヤンパンの産湯で巨船誕生す

欲望は真珠となりぬ貝の欲

六三三、四のあたりで狂い出し

下水溝 水は生きてる午前二時

Ⅱ 蛇 皮 線

(昭和47年～48年)



神様の削った鼻を高くする

投書欄礼節厚き人と知り

福は内 豆拾うとき若返える

鈴のなる森に幼い日のわたし

天の橋立

童心に還る目になる股のぞき

巡礼のあとを追うてる春の蝶

郷土史を語る先生村を出ず

鍵っ子の怒り卵を割って飲む

貝に耳あてて天使の唄を聞く

流しびな飾り女の影ゆらぐ

濡れ衣を身に着せられてからの鬼

空びんに冬日を分ける裏通り

母百句路郎・水府も母を恋い

国訛り消ゆることなき国を捨て

安心をしたのか風呂に行くという

生きていく穴をもぐらは掘り続け

神将新薬師寺のみな歩かんとする構え

消費者へ乙旗あげたゴミの山

耳底に残る豆撒く父の声

湯気上げて河豚大阪で成仏す

ポケットからゆっくり出してくる微笑

肩書は都へ置いて来た帰省

寺田町界限

国鉄に二階貸してる縄のれん

長崎弁大阪弁にチャンボンし

チャンボンは長崎の方言。
こっちゃんにすると言つこと。

表札はみな善人の貌になり

飛鳥坐神社

マスコット 性神土の匂い持つ

さよならがやつと終わった船の向き

G
N
P
一
位
に
迫
り
山
河
荒
れ

友
情
も
恩
の
一
つ
に
富
有
柿

出
張
の
赤
字
地
酒
が
う
ま
す
ぎ
る

土佐はよいところ

悠久の歴史を見たり山焼く火

ストーブに血の繋がりを暖める

冬 銀河音なく笛の音が凍る

牛乳で育つた猫も爪を磨ぎ

ぎりぎりに生きて詩心を持つ男

蜜蜂のルートを飾る菜種の黄

ストレスが溜まり人形歩きだす

歳時記は初夏　人形の寝るむしろ

文樂のかしらは恋に酔い痴れる

母の日の母すこやかに蒲団干す

半生はやがて一生漁夫の墓

回想の糸口となり走馬灯

聖戦と叫んだ舌を仕舞い込む

陽炎の立つアルバムの一ページ

人生劇場 今日蒸発の一場面

ぎりぎりのところで理性の灯がともり

せっかちな客は逆転劇を見ず

人間の箱寿しできるエレベーター

寝台車　みかん一つが転げ落ち

湯葉料理　京は底冷えするところ

離婚率増やし二階の夫婦去る

かもめから白さ奪っていく港

沖縄返還さる

蛇皮線も晴れて君が代奏でる日

遠い日の母の匂いのする祭

天平の星が輝く石舞台

言うべきか言わざるべきかハムレット

空想の翼広げて神話読む

コンベアーの流れに指は逆らえず

事件記者ペンが重たい日もありぬ

居心地のよさやどかりに闘志なく

陸橋の夏よろよろとかぶと虫

網の目の死角に漁夫は消えている

かくれんぼ鬼のひたいが蚊に食われ

補償して欲しい片輪の蟹歩く

遠い日のいくさ忘れた浴衣がけ

初恋の記憶の底のたけくらべ

板の間に連綿として女の座

天職に生きて左右を振りむかず

駅名のやまとに変わる金魚池

花火師の指紋が天に散ってゆく

乾杯へさくらさくらの花吹雪

かまきりも土に帰るか土の色

微生物顯微鏡下で音立てる

幸運の女神の館やかた 蜃気楼

風船に秋の心が乗ってくる

札束の前で小さくなる野心

石仏に薄のつくる波がしら

未来図に貼るレットルに鳩を描く

樂園に向かい流燈動き出す

あかね雲　　笛吹童子笛濡らす

どの顔もみな庶民なり羅漢像

船造る火花男の匂い持つ

郷愁の舌綿菓子の色に触れ

祭笛 天井棧敷に月を置く

能面に喜怒哀楽の情重ね

寄宿舎へ来てから知った親の恩

秋天に送電線のハンモック

天牛を出れば寛美の阿呆づら

社会鍋の底に棲んでる白い鳩

ふり向けば振り向いたので片手上げ

草枯れて道しるべにも似た仏

原爆忌消えることなきカレンダー

磯の香を朝陽が強くつよくする

二学期も終わりチヨークの粉払う

手袋を右からはずす左利き

育児書の通り肥満の子が育ち

点棒を数え青春磨り減らし

梅咲いて紀州の海は陽をはじき

大^{おお}字^{あざ}の地名もろとも雪の底

木枯しに背中押されて凡詩人

地下街で庶民に見せる冬の虹

冬の貌テトラポットの死屍累々

鬼の面かぶって鬼になる強さ

流しびな手を取り合つて潮に来る

百戦へ常に危うき凡夫なり

青丹よし奈良に祕法の墨作る

山葵田の流れに民話澄んでいる

天上にスモッグ地下に蟻地獄

棒グラフ　香車は町へまっしぐら

善人の矢鏃は急所避けて飛ぶ

モナリザがけだるく笑う昼下がり

眞実を求めて渡り鳥は発ち

開発に河童の皿の水が減り

休火山のような個性が見破れず

絵本からキリンの首がこぼれそう

偽りと知っても打たねばならぬ石

キタ・セクスアリス 氾濫鷗外忌

キタ・セクスアリス 明治42年の鷗外作品。発禁処分を受ける。自己の性欲火を述べたもので、自然主義の露骨な本能描写へ対決の姿勢をとる。

飛ぶことをやつとマスター燕の子

首塚は言わず語らず飛鳥朝

辛口の味も家系と共にあり

掌てのひらに彫つた系図を持ち歩き

風の吹く街でよろけるいい夫婦

七月の浴衣は派手にはでに着る

奇形魚の怨不知火となり炎ゆる

橋越えてみても童話が見当たらぬ

夕日背にして光る蜘蛛の糸

マネキンへさやかに秋の来る気配

ひまわりの黄色まぶしい野の仏

渦潮を今朝越えてゆく渡り鳥

糸車ロマンの綾を織りつづけ

空っぽの頭で雨を聞く座禅

公約が走り抜けてる零地帯

棧橋は朽ち軍国の母を見ず

背に家紋負うてでで虫息が切れ

でで虫一かたつむり

秋雨を待つ落柿舎の蓑と笠

Ⅲ 催馬樂

(昭和49年～50年)



白鳥の夫婦で半日浮いている

祝宴のせめて仮面は取り給え

繚乱と廊下本日 P · T · A

注連を縋う河内生まれの背を曲げて

少年の指悲しくて石拵む

限界を覚った父は童話読む

早春の掌に鯛焼きが暖かい

魚は木に登り日本沈没す

心のどこかに父が残した水溜まり

血の池で
潔癖な鬼手を洗う

グラスの中で
小人は白雪姫を待つ

雨だれは聖母マリアの瞳に溢れ

年輪に君好きな色塗り給え

まぼろしの鬼に追われている孤独

意地捨てた独楽安らかに横たわる

よ
れ
よ
れ
の
煙
草
一
本
老
教
師

連
弾
の
父
の
指
よ
り
血
は
移
り

叩
き
売
り
見
る
織
田
作
の
懐
手

還らない父の迎え火浜で焚く

二次会はいらぬ帰郷の飲み明かし

開発を逃れて蒼き蝶は去る

放蕩や
箱それぞれの色に塗る

山男
積乱雲をよじのぼる

紫の雲が
残した花時計

遠花火見るふるさとの外廁

造反の鬼金棒を捨てて去る

朝顔はすぐしぼむもの未練断つ

眞実を神にあずけてじつと待ち

中だるみしたそのまんまそのまんま

核兵器止める両手が君にある

悲しみの笛は夜霧の中で吹け

白波に消える仔亀の幸祈る

五百羅漢の一人になって友が去る

海を見る女
心の荷をおろす

氏神の杉に一番星がある

いつの日か砂に埋まる流人仏

野 仏の顔
風雪に逆らわず

み 仏に女貧しき灯を贈る

飼 っている鳩の餌となるお年玉

長かつた最高裁の門を出る

月明に打つべし華麗なる太鼓

橋越えて素朴な椅子を見つけたり

鉛筆で生まれた虹がすぐ消える

背水の陣小細工と縁を切る

干草の匂いで深くなる眠り

強力の背にしんしんと雪積る

節分の豆を分け合うめおと鬼

あこがれの恋だと思ふ初潮の子

石
仏
は
石
に
還
つ
て
文
化
果
つ

流
氷
が
南
の
旅
へ
出
る
岬

風
船
が
割
れ
る
と
青
い
空
が
あ
る

祈つても眺めてもよし野の仏

苔青く梵の一字があれば足る

一冊の本に消えない過去がある

催馬樂さいばを唄うたうは少し酔ようた鬼おに

催馬樂は古代歌謡の一つ。平安時代の初期に発生。

赤門へ抜けるトンネル掘っている

ビール飲むその他大勢ビール飲む

愛もろく破れてかかる月の暈

複合汚染 原稿の字は美しく

新しい戸籍をつくる判を押す

軍歌唄うこの安らぎを捨て切れぬ

虹が消えると海は蒼さを取り戻す

信愛が生まれる踏絵なら踏もう

勲章をつけると急に背が伸びる

友情を遮ぎる鉄の壁はない

ふるさとの灯はさそり座からもらう

夕顔が咲きまぼろしを見る時間

晩秋の路かまきりの鎌拾う

裁かれる街でポプラは枯れていく

祈りたいので さむらいの名を捨てる

古里を捨ててもみかんくのにの味

野良猫の跳ぶ空間に秋がある

坂本竜馬像

海を見る竜馬も腹のすく正午

ささやきに似た水音を聞く別れ

さよならがパントマイムになる港

落書きにその謎を解く考古学

温室の土で季感をつゆ知らぬ

つららから水滴童子はねて春

長崎稲佐
ふるさととは遙か 外人墓地暮れる

野良犬の頭を撫でている天使

蜜柑むくひとそれぞれ
の童唄

船頭小唄にすこし傾く犬の首

名も知らぬ町で紋白蝶に逢う

天才がひっそり死んだ町という

海女となる定めでもぐること覚え

神さまが耳を塞いでいる願い

天皇の微笑に深い傷がある

IV 獅子舞

(昭和51年～52年)



歴史にはちつとも残らない仲間

群衆になると暗示がすぐかかる

春風が吹くと巢箱の窓があく

雪積んで明るく笑うこけしの瞳

負けん気の女は絵馬に字を書かぬ

干柿の甘さがわかる相惚れで

地下足袋でけつねうろんという浪花

三月の湖にて洗う女櫛

戸締りをしてから長い便り書く

南
禅
寺

楼
門
で
み
や
こ
見
渡
す
春
の
鬼

旅
に
生
き
旅
に
死
に
た
る
瞽
女
日
記

秋
篠
寺

紅
梅
に
ふ
く
ら
む
伎
芸
天
の
胸

まぼろしの笛まぼろしの森に聴く

八つ当たりできぬ仏の貌に会う

スタミナに乗って御輿は宙を飛び

海鳴りへ少し傾く北の町

春の坂少年母の手を離れ

ユ一モアのわかる柳はよく揺れる

一と言で方程式が解けてくる

てのひらの錢一枚の地獄図絵

裏表知ってる鬼はひとりぼち

枯野にも楽しみはあるアコーデイオン

唇を讀む六月の風の中

四捨五入して善人になるのだな

悪人は一人もない寄席の顔

麦笛を吹くと男の旅になる

王様は笑う
女王様は留守

窓口で不意に聞こえた国訛り

雲永平寺水の悟りは遙か春の天

科学には遠く民話の水がある

ブレイキが効かないままの蟻地獄

風薫る馬鹿な石垣積み上げて

灰血の中に記憶の海がある

峰一つ越えて
仏の声を聞く

バイブルを手近か
においている貞女

戻れない橋が
かかっている故郷

東塔と西塔の私語
風薫る

当麻寺

潮時で笑い袋を開けてみる

雑兵の片言などは届かない

人と人結ぶ絆が露地にある

卑怯者拳がいつもゆるくなる

長崎盆祭り

阿茶さんもオランダさんも見た花火

阿茶さん||中国人を長崎の人は、愛称でこう呼んだことがある。

煩惱を鎮める椅子が置いてある

鳩尾みぞおちに残る女の長い冬

酒好きの鬼が揃うている花野

地動説だから脱線するのだな

民話の中に庶民が生きて来た力

思い切り怒りぶつける黄金虫

傾いた塔で分別見失う

背中から受身になって浄め塩

祭笛
揃う踏絵を真中に

煩悩はこころで捨てる一の橋

高野山

烏瓜真っ赤に熟れて長寿村

まぼろしの笛とも思う水く鶏な啼く

一 燈に貧者の本音秘めてある

一 市民遠き戦史の中に棲む

海平戸島鳴りを隠れ念仏とも思う

缶詰の明日の詩をとり出そう

罪一つ背負う身になる行掛り

蕭々と冬の風置く石一つ

阿
伝
の
呼
吸
で
同
じ
釜
の
飯

酒
倉
に
も
た
れ
便
り
を
読
む
杜^と
氏^じ

君
を
慕
う
胸
の
中
な
る
銀
世
界

切り絵から抜けて自在になる少女

親という絆は断てぬ逃亡者

極楽に慣れぜいたくな花を買う

シンボルとなる十字架の罪つくり

絶壁にかける命が揺れている

雪沓に残る女のあたたかみ

握手した心小さな灯がともる

民法はいらぬ親子の風の糸

出直しの背中に母の眼を感じ

紙ヒコーキ降りる小さな庭が好き

折り鶴の一羽が祈る風の彩

逆風に勝てぬ日記の白つづく

お銚子も追加陽気に春の鬼

定年の椅子に手垢は残さない

かけひきをしては哲学者になれぬ

天
平春日社
の
闇
の
深
さ
よ
万
灯
会

丹
念
に
見
る
と
羅
漢
に
俺
が
居
る

歳
月
の
流
れ
に
時
計
齒
が
立
た
ぬ

春愁を払う琥珀の酒で足る

草花と共に童話の種も蒔く

巢籠りの鶴は静かに石になる

北風の夜はこけしも共に寝る

貧富の差
石の仏は石のまま

文庫本ポケットに入れ心富む

父と子を結ぶ絆の肩たたき

埋葬の土新しく蟻の列

舌出したまま獅子舞は汗を拭く

鬼追うていつか一人になっている

貧乏な詩人きゆうりを選っている

演技など知らぬ少女の涼しい瞳

銀貸一枚 愛の泉にひかるもの

流燈に偲ぶひとつの彩がある

野良犬がさつさと踏絵ふんでゆく

浮雲を今日も呼んでる芙美子の碑

南蛮の絵血に残る波の唄

極限で思い出すのが子守唄

河内太鼓のひびきで熟れていく西瓜

一本の帯が記憶を呼び戻す

トンネルを掘らねばならぬ玉の汗

遠囃子 奈落の底で聞くうちわ

戦争を話題にはせぬ義足鳴る

早起きをして雑兵を脱し得ず

雷で一揆の旗が動きだす

揚羽舞う無韻の中の歓喜天

記念樹を残し故郷は遠きかな

チャルメラが鳴りメルヘンの夜が更ける

善人が善意引きずる尾髄骨

月光に涙溢れる埴輪の目

血管を溢れんばかり気魄満つ

百度石 母の素足を風が斬る

若き日の遺書が流れる川がある

鈍行の主張走れば走れます

ひとり立つ証言台にある重み

因縁で地獄へ届く蜘蛛の糸

清流に真直に立つ
独樂の芯

シャボン玉はぜ
空間を無に還す

コスモスがこっそり
聞いた風の私語

勲章をもらう無口な顔の皺

綾とりの指の温みを信じよう

十二月 紐ひっぱったまま走り

煮こごりを母と分かちて食べた日よ

背びれとれ地獄のぞいて来た魚

雲隠れしても地球は丸かった

自己主張五分進んだ時計持ち

風が吹く枯野の僧の道連れに

蛇口締めても家計簿から洩れる

クーラーに嘘も一緒に冷やされる

雑草のつもりが軽く引抜かれ

中年の魅力を秘めた束ね髪

箱舟に同じ民族なら乗ろう

ふわふわの椅子で反省などしない

太棹に乗る人形の色模様

V 修羅出土

(昭和53年～55年)



興亡の涙に月は無縁なり

老人と海

白鯨の傷を老漁夫知っていた

鬼門より鬼門へ消える雪女

五百羅漢の顔はきのうの顔でない

トランプのクインは嘘を許さない

黄金虫ワンマンカーに乗せて貰う

ウラン 鉱探して髪が白くなり

南中の高度で俺を見下ろす奴

南中：天体が子午線を通過すること。
そのとき天体の高度はもっとも高くなる。

雨の夜の女おとこの品定め

風は樹に樹は風に鳴る古里よ

朝刊がきれいに足跡つける雪

領海をちよつとはみ出た蟹の脚

傷口を癒す坂なら登らねば

一枚の切符に賭ける四面楚歌

父と母
母が重たいヤジロベエ

竹とんぼ やがて母の背越えて翔ぶ

善悪を呑んで樹界は黒くなる

チャップリンに憧れている馬の足

誘われて誘うて踊る円舞曲

締切を一日のばす民主主義

頂点で神の姿を見失い

モンローの鼻の形は忘れない

向日葵がぎらつく基地の鉄條網

風薫る 小便小僧も男なり

パン屋の猫はパンを食べない臍曲がり

島貧し　いくばく稼ぐ海女の笛

大坂形水氏句集「谷町」上梓

つくつくし鳴き谷町の地藏盆

俺の意志貫く俺の血が流れ

友情の記念にあげたかぶと虫

風呂敷に男がつつむ母の鈴

からっぽの笑いが残る首塚に

知恵の輪が鳴る少年のいきどおり

包んでも包み切れない罪の色

島の掟も赤いブーツにかなわない

仲良しが無心にうつる水鏡

満開の花に誘われ修羅出土

修羅Ⅱ古代、大木・大石などを運ぶ装置であった。
53年大阪府藤井寺市でほぼ完全な形で出土した。

風媒花 風に生まれて風に死す

怒りっぽい牛で闘牛には成れぬ

過保護からやつと逃れて来たキャンブ

学帽は廃れ校風主張せず

狩人に冬の詩うたなど生まれない

はなやかな過去がこぼれる砂の塔

出雲

神々の乾杯風ふう土ど記きに星が降る

長崎駅

駅前を歩く光陰矢のごとく

一さつの雑誌と旅がまだ続く

金米糖むかしむかしは甘かつた

まつり笛 父の吹きたる如く吹く

正体は道化師だったデスマスク

父の日も母の日もあり根をのばす

長崎片淵川

彼岸花流れメルヘン探す川

火の彩が好き
な女の着る和服

牛飼いが地蔵菩薩に牛つなぐ

吊橋が揺れる 掟が生きている

噫無情 てるてる坊主から雫

カミソリの刃でも雪崩が起きるだろ

校あせ倉くらの絹に古代の美が匂う

指切りの指はいつでも美しい

風を見た男に詩ミユーズ神会いに来る

永久に辻褃合わぬ兵の墓

この村に賭ける若さで野火を追う

愛情に目覚めた千羽鶴が翔ぶ

神様が消える迷路の中ほどで

自動扉がきつと開くと信じている

潮騒が女の胸にひびく岐路

能面のまわりは深い霧である

春風を受ける姿勢は柔らかで

太陽がのぼり一匹螢死ぬ

おめでたの極におかめの面がある

人間に差別はいらぬ首飾り

情勢は不利でも恋は燃え盛る

教育の塔に遮断機許されぬ

砂時計誤解のままに砂落とす

シナリオの中の男は殺しよ

鬼瓦 母系家族を守り抜き

知恵の輪をみごとに解いたひとり立ち

夜の霧二人に怖いものはない

二人三脚明るい夢を信じ切り

明日への足音聞かす雪女

口紅で描く女の幾山河

雨の日の花屋の花は控え目で

銀行の堅き鉄扉よ多喜二の忌

ふるさとの水は神話のまま流れ

ぐい呑みを下戸が買ってる旅の町

台本のようには馬が走らない

止まり木にとまって俺は平社員

国引きの神話に星の降る渚

へその緒がカラカラと鳴る玉手箱

六法の行間狭い綱渡り

切り礼はないが辞書なら持っている

遠回りしても英雄にはなれぬ

こおろぎが鳴き鯛焼きを懐に

笹舟と遊ぶ河童の夏休み

少年の日の顔映す井戸がある

野 仏も 中年 頬が まるく なり

松山行

老いた 坊ちゃん 坊ちゃん 列車に 乗る

火 祭りの 炎に 父の 愛が ある

音もなくぼたん雪積む六地藏

頭の高い女はたまに煮てやろう

父の真似得意で父にかなわない

さわさわと私語の聞こえてくる並木

黒板に人間模様渦を巻き

裁かれて裁いて暗い人の顔

地獄絵でもがくは絵師の魂か

焼き茄子の筋の一つに秋がある

けものみち マナー残したけものみち

柿を剥きながらダリユーの話など

ダリユーはダニエル・ダリユー。フランスの名女優である。かつてフランス映画では、ダニエル・ダリユー、アメリカ映画では、ジーン・アーサーに血道をあげて映画館通いをした。ジーン・アーサーは名作「シェーン」で少年の母親役をしていたからご存知の方も多いであろう。

珍客も三八銃の重さ知り

針供養済ませ女は旅に出る

天王寺駅

熊野詣もうでの壁画眺める待ち合わせ

風花の貧しい村の干がれい

大原の里

菜の花を武蔵が切れば蝶になる

一枚のうろこが残る父の舟

せつかな男で輪ゴムすぐ切れる

能面の古さが時に怖くなる

噴水がだんだん低くなり暮れる

藁小屋の藁の匂いに嘘はない

古都の雪待たねばならぬワンカット

業
と
い
う
賽
の
河
原
の
石
の
数

宇
宙
と
は
無
数
の
星
が
持
つ
魅
力

百
萬
遍
念
仏
唱
え
葱
坊
主

ジャンケンをすると聞こえる子守唄

年玉を貰い風の子風と去る

鍵っ子が一人残った縄電車

本腰になり雪降らす雪おんな

巢箱から春の楽譜が流れ出す

第六感 呼鈴押さぬことにする

重い荷は持たぬぞ俺はアルバイト

激励をすることもある鬼の面

折り鶴の我慢翔ぶ日を待っている

鋭
さ
の
裏
の
や
さ
し
い
花
言
葉

お
水
取
り
す
み
三
月
の
塔
の
影

干
柿
が
甘
く
な
ら
な
い
の
も
誤
算

月へ飛ぶ夢は忘れぬ竹とんぼ

針箱に母の残したわらべ唄

落の臺 三月の町開け放つ

化野あだしのの石の笑いは風に消え

反動はやがて真っ赤に爪染める

宝石が春の小川の底にある

裏町のさくらも春を忘れない

感情の起伏で揺れる月見草

実印を押すとき息を整える

傷跡を包む香水なら振ろう

海峡に白き波立つ輪廻かな

歳月の重さに耐えている遺跡

注連繩を渡り一人も帰らない

牡丹餅が棚から落ちる日を待とう

ふるさとの水を風船売りが飲む

大原女のあたまで運ぶ白い秋

湯豆腐の湯気が豪華に見えるとき

辛口のカレーー生き甲斐思い出す

仲間割れ利口鴉と阿呆鴉

父が唄う確かに安来節である

藪の中遺書一枚が残ってた

向日葵の黄は生　　死者は土の中

頬杖の向うを人は通り過ぎ

一膳めし屋のすこし淋しい紅生姜

安保反對デモ回顧

反戦歌波乱の中の少女の死

七人の敵と対した面はずす

戦前の蚊のしかばねを見る蔵書

クラバー邸

お蝶夫人が海を眺めている洋間

夕焼けて縄に戻った縄電車

香水は要らぬすみれ堇をかうときは

占いをまだ信じてるおっかさん

信号は青で蛙が啼いている

阪神ファンで女優の名が売れる

演技とは漬物石を持つ女優

ふるさとの民話をいつもふところに

折鶴の一つ一つが梅雨に入る

豆の木を登るジャックが濡れる雨

浮世絵の女が旅に出る脚絆

浄め塩それで絆が切れるなら

梅干とらつきよがいつもあるわが家

五百羅漢の隅の男は賽が好き

のらくろをつれて少年歩く道

廻り舞台でいつも眠っている男

貧弱な喜劇役者のあばら骨

古傷がすこし痛んでくる港

箱崎宮
神風が吹いた跡なら見に行こう

四面楚歌積木の上であぐらくむ

火葬場の煙他人に見えてくる

キリンの首に星の首輪がよく似合う

沖繩

絵葉書に大和沈んだ海の彩

牛蒡剣

真先きに橋を渡るは二等兵

つ
つ
が
な
く
小
舟
で
渡
る
父
の
海

出
世
し
た
男
が
通
る
村
の
橋

ス
モ
ツ
グ
で
千
本
渡
し
の
舟
が
消
え

腹いせに石など蹴らぬ自尊心

観光地図にうなぎ一匹描いてある

サラリーマンいつも首には鈴をつけ

こんにやくに噛みつくような正義感

超ミニで囿りの役を演じきり

星一つ流れて消えた水子塚

サービスにヒチコックが出る自作

抵抗の画家は絵具に語らせる

一刀両断そんな言葉を選っている

博物館 埴輪の兵の無表情

一枚の地図に味方を書き入れる

木枯らしに忠臣蔵のビラが飛び

水中花　　女ひとりのジュース飲む

自慢話を山の鴉に笑われる

黒豆を父の記憶の中で煮る

愛情のしるし叩いて叩かれて

赤電話八百屋お七が掛けている

千枚田 島の伝説生きている

文学が好き
な偏平足である

賞罰もなく
素うどんすう床机

山の子の臍を
山女が撫でにくる

危機一髪
鞍馬天狗に救われる

花電車花が萎れている夜更け

手花火の父のまわりに絆の輪

吉備団子ゲストになると貰えます

色即是空 流れの中に身をまかす

古代蓮

二千年タイムトンネル越えた種

鍵返し別れた白い日記帳

河内葡萄の出来考えているきざみ

ためらいもなく警策きよさくが肩に来る

借景もない弁財天の池が枯れ

ざくろ熟れ寺が間近い道しるべ

家系図の一人責任とらされる

勲一等 真相吐かぬ藪の中

岩田美代さん句集「縞かすり」上梓

情感を深く沈めて縞かすり

エンゲージリングをはめて来た天狗

屋根越えた毬は白さを失いぬ

本物が来たぞ一瞬しんとなり

長男と一本杉が残ってる

初雪や石のきつねがコンと啼き

すぐ風邪を引くのはミンク着た女

尼寺の門は毛皮を脱いで入る

旅役者ひいきと囲むふぐの鍋

鹿笛で戻らぬ鹿の反抗期

焼き立てのパンの力を知ってるか

美しい景色を探す時刻表

乾杯でおやじの海を讃えよう

ふところに切札抱いたままの冬

豊年が雷さまとやってくる

休肝日などと洒落ても酒が欲し

六道の辻で振舞酒に酔う

群 作 品 集

閑 谷 巖

木 曾 山 中

高 野 山 景

河 内 風 景

河内ずまい ①, ②

大和風物誌 ①, ②, ③

ヒロシマ8月6日以後

苔 の 花

きつね雨 ふあんたじあ

木次よいとこ

大阪風景 (1), (2)



Boys be ambitious. くれ閑谷巖

講堂に座す幻の先哲等

椿山亭椿愛せし君と知り

鳴竜のような訝に耳澄まし

石のがに鉄砲拭いた油跡

石塀に草を生きぬ庭師の智

石柱は贅じよつなぐ石贅置かず

万緑に光る蕘は備前焼

万緑の景に閑谷贅溶けて

松の芯伸びて烏城を持ち上げる

木曾山中

霧雨の音なく木曾に降る夜明け

夜明けまで虫が鳴いてる蒼い木曾

馬子唄も霧を透かしてくる木曾路

復元の宿場と知らず燕飛ぶ

お六櫛木曾に生まれた髪飾る

馬籠から妻籠へ恋の燕飛ぶ

木曾谷で恋の火の粉となる螢

屈託もなく木曾谷に蟬わめく

道おしえ 宿場はずれで引返し

五平餅食べて宿場へ別れ告げ

高野山景

てんとむし止まり仏の耳飾る

七曲がり 蝶が曲がって道曲がる

辻仏 北斗の杓で水を呑む

露草は小さき地藏に手向けんか

宿院に飼われて鯉の主かきとなり

千年の法燈護り法師蟬

鮑はたけの影走る清水を闕あ伽かとする

夕焼けて高野浄土の濡れ仏

六地藏 母の情けのよだれかけ

浄土にも地獄変あり 蟻地獄

河内風景

河内野の土から湧いてくる太鼓

軍鶏の羽散って河内の祭済む

涼しさが来るぞ河内の稲光

河内野の鴉 生駒を基地にする

河内蟬 鉄砲節に負けず啼き

地藏盆 河内音頭はドッコイセ

蚊柱の中で音頭の太鼓打ち

犬小屋の家賃はとらぬことにする

無礼なる蛇払いのけ河内弁

河内野に生まれ河童は音頭好き

河内ずまい（１）

犬ふぐり 悪名高い八尾ずまい

囀りに人には見せぬ石の棺

金剛山ニ
ン
コウは風のみなもと 風ぐるま

鳩笛は土の匂いの甘茶仏

春泥に顔をそむける路傍仏

蝶翔んで蝶と相似の池の彩

仏生会一期一会の浪まく羅

節分の鬼に情けの酒飲まそ

錠かける「心」裏返えす絵馬の風

たんぽぽの台座に睡る南無観世

河内ずまい（２）

雀の子
軒より落ちて河内酒

徳利に菜の花挿して八尾ずまい

彼岸花
河内便りは風に乗る

露の里
老婆何しに朝を発つ

榊酒に写る秋晴れ
信貴・生駒

寒雲や胃酸過多なる胸の奥

紅梅に白梅混ざる風の芸

洋風にたそがれ志紀の屯倉跡

犬小屋に犬は睡たげ猫の恋

赤とんぼ 俊徳丸の塚を翔ぶ

奈良漬を下戸が選んで奈良土産

斑鳩いかるがに塔並び立ちか蚪と生まる

蚪世にわたまじやくし

桃咲いて大和三山指呼の間

晚秋飛鳥寺の飛鳥大仏剝落す

澤市壺坂寺に物みな匂う寺の坂

つちのこに明日の
天氣を訊ねてる

三輪山
全山に新緑
炎やす酒の神

法華寺
犬守りは尼
似の柔和雨すこし

さくら咲く飛鳥
坐のおとこ神

亀石の甲羅
ことしの花が散る

桜井線消す葛城の雪しまき

山焼く火関西線の軌條越し

二^{かた}上^{かみ}山は二嶺並びて西隠す

石仏に触れて風花散り急ぐ

家伝薬古りて三寒四温越え

郡山城
春琴を聞いて城無き城下町

節分や万葉林に鹿放つ

大仏に冬日あまねく奈良市内

大安寺
がん封じ竹は荒切り寒の酒

春日大社
万燈会立ち並びしを閲兵す

大和路の秋
錢箱に柿並べ

葛城の寝釈迦
クーラーなどいらぬ

紋白蝶ふいに出てくる大和古寺

ポスターの祕仏が招く御開帳

演出でないが頭を下げる鹿

風小僧 大仏殿の鷄尾に乗る

桃の花 古墳静かにヴェイル脱ぐ

高松塚の美女とデートをした歴史

奈良漬にすぐ酔う下戸の奈良巡り

げんげ咲く 飛鳥・天平そして現代

ヒロシマ 8月6日以後

ピカドンのドンは聞こえず瓦礫積む

被爆地は爆心地より約一、二km、ドンは聞かなかつた。ドンを聞いたのは郊外の人であつた。

炎日を黄砂のごとく蔽い隠す

爆風は広島の上砂を巻き上げ、天目を遮閉した。

いななきを馬もろともに焼付けぬ

出勤途上のA.宮様、相生橋上にて爆死。

紙屋町 電車は骨に成り残る

幾人の柩となりし市電惨

昭和9年9月、西部第54部隊（久留米工兵隊）ヨリ陸軍兵器学校広島分校ニ転属。同校教育終了後、直チニ陸軍技術特別幹部候補生指導教官ヲ拜命。

昭和20年8月6日午前8時15分、広島市舟入幸町ニ於テ、原子爆弾第1号ニヨリ被爆。九死ニ一生ヲ得タリ。

泥人形沈んで浮いて地獄川

清冽な大田川は死屍累々。火傷を受けし人々、熱に耐えかねて飛び込みしたためなり。

囚人が首に縄掛け屍上ぐ

ふくらんだ屍を持つことはできない。

人間の蒸焼き並べ橋の上

この橋多分住吉橋だったと思う。

ヘイタイさん 水を下さい水・水・水

これもまた功德末期の水飲ます

助からぬ重傷者が水を欲しがる。水を与えれば十分ともたず死の世界へ。

火の玉が遠慮なく食う顔の皮膚

火の玉に嚙られ皮膚が垂れ下がり

凄い放射熱のため身体の露出部分に大火傷をおこす。このあとがケロイドとなる。

うじが湧く　まだ息残る生体に

江波陸軍病院分院にて所見。

赤チンをバケツに融いて塗ってやる

薬が乏しかったので、防火用のバケツの水にとかし、軽傷者のみを手当する。重傷者はどうせ助からない。

下敷の妻に生別 准尉無念

火の回りが早く、家の下敷になった妻を救
助できなかつたさうである。

肋骨が焼け残ったまま黒い雨

江波の空地にころがっていた。6日の夜は
雨になる。

妹の行方を探す兄の顔

わが戦友家屋疎開作業に出たまま行方知ら
ずの妹を探して皮労困憊。

筆生の髪の毛脱ける二十日過ぎ

いよいよ原子白血病が猛威をふるいだす。
筆生は軍隊用語で事務員のこと。この事務
員は女性で、妹も髪が脱けはじめた。どう
なったのかこの女性の消息は知らない。

被爆者の血を吸い開く夾竹桃

大田川河畔は夾竹桃が咲きほこっていた。

感激の再会 臨時收容所

学校に罹災者の救護所を開設する。

罹災者へ馳走 経理部士官太っ腹

トタン板かぶる死臭に慣らされる

校舎の前の畑は、死体焼却場になる。

髪洗う 肌に食い込む砂の粒

著者も家の下敷で頭に砂の粒が食いこみ、髪を洗うとザラザラした。

原爆に竹槍のこと口にせず

敗戦の詔みことり聞くいつく島

敗戦の大詔は電波が乱れ聞きとり難し。

軍刀で切る青竹の無念斬り

神州不滅はあえなく潰える。

死臭なお漂う街を夜行軍

復員列車死のヒロシマを発つ深夜

広島始発、博多行無蓋貨車であったが、九州方面出身の候補生諸君を送り出す。これで肩の荷が降りる。

苔の花

青苔の呪文で過去を呼び戻す

水子ごろしの家のどこかに苔の花

ある女　せつせと苔に水をやる

苔蒼くなるのは石の怨みかな

華麗なる苔に包まれ木乃伊ミイラ仏

糸蜻蛉 苔の布団に寝転がる

天道虫 苔のプールに身を沈め

苔むして山椒魚は太りすぎ

苔の花 寝釈迦を囲む蟲その他

苔蒼く梵の一字があれば足る

きつね雨 ふあんたじあ 

嫁入りの娘の羽子板へきつね雨

角かくし揺れる馬の背きつね雨

酒樽の朱色が映えるきつね雨

きつね雨 火の見やぐらは空っぽで

しやんしやんしやん鈴が鳴るのはきつね雨

きつね雨　水車ことこと回ってる

墓石みな四角に濡れるきつね雨

きつね雨見送る馬頭観世音

きつね雨　今宵きつねの酒盛りで

きつね雨　村のはずれで身を隠す

木次よいとこ



辛夷ニギ咲く新見インター通り過ぎ

帝釈と名付けた峽の雪やなぎ

湯の宿は「いっぴやあ花の咲くところ」

前夜祭 さざめき消えて夜のさくら

湯の宿の潜ひそまりかえるさくらの夜

湯の宿の突風夜のさくら打つ

さくら土手 木次の鶉雨に濡れ

満開のさくら映して川の彩

花咲いて花のトンネル人が埋め

木次去る 握手の温み大切に

大阪風景（1）

蕪村生地毛馬
開門を閉ざし春風馬堤曲

盛塩の曾根崎新地夕しぐれ

アベックがお初天神通り抜け

神農の虎が首振る道修町

南御堂排気ガス満つ芭蕉句碑

炎 天 に 大 蟹 動 く 戎 橋

食 い 倒 れ 道 頓 堀 の 胸 算 用

歌 舞 伎 座 が は ね ナ イ タ ー の 灯 が 残 る

再 会 は 心 斎 橋 の 小 大 丸

刑 場 が 千 日 前 に あ っ た そ な

大阪風景（2）

明王に苔の匂いの法善寺

人妻と黒門市場歩いてる

四つ橋のプラネタリウムに雨が降る

いづもやの匂いが鼻にくる師走

香煙かはた春雨か一心寺

亀睡る四天王寺は春らんまん

一日一善四天王寺の鐘が鳴り

賭将棋 通天閣に灯がはいり

春風が抜ける住吉太鼓橋

高速に大阪しぐれ灯がにじむ

跋

香川酔々さんの句

満開の花に誘われ修羅出土　が五十三年度路郎賞になり、その受賞感想が「川柳塔」誌六一七号にあります。

『建前も本音もなく、路郎賞がいただけるのは、とても嬉しい。これまで、いろいろな賞もいただいたが、やはり路郎賞ともなると重味を感じる。川柳は、作家の眼（心眼とでもいえよう）を通して、自然と人間の係合い、あるいは人間の存在における一現象を、流れの中で捉える物語詩であると、私は考えている。この眼で捉える努力が、先師のいわれた、人間陶冶の詩に通じるのではないかと思う。ますます研鑽をつみたいものである。』

昭和五十七年、柳友清水健司氏建築の念願の新居には、数学の先生より国語の先生が以合うと思うほどの川柳の詠句集、文学全集の蔵書。「天神さん」や「郷土玩具」のコレクション。愛犬と愛猫。そして洋酒の瓶。顔を合わせると、「バイどや」と誘い、うまそうに呑み、呑むほどに柳論に花が咲いたものです。

昭和五十八年八月十六日、午後九時半頃、NHKを出て、地下鉄谷町四丁目駅近くの呑み屋で、当日の「よめやうたえや川柳天国」の感想をサカナに一ぱいやっているグループの中心に酔々さんの姿がありました。

病後の酔々さんの体調を考慮して早々と解散したのですが、酔々さんと呑んだ最後であり、言葉をかわしたのも、この日が最後でした。

九月五日、与呂志さんと二人で見舞いに行つた時は、種々の機械やパイプでやっと生きている状態。その数日後、再校正がすんだゲラ刷りの「光背」を手に渡した時は、その「光背」をギュッとにぎりしめ、顔にも大きな反応がありました。

何百冊も本作りをしてきた酔々さんには、自分の句集の完成を自分の目でどれだけ見たかつたでしょう。三宅さんの好意で特製の一冊を棺に入れてあげたものの、心が痛みます。

西尾棗主幹の序文をいただき、ここに酔々川柳句集の発刊にこぎつけました。酔々夫人や柳友の御援助に感謝しつつ。



書齋にて（八尾市志紀町）

● 著者略歴

- ・大正九年九月二十八日長崎市で誕生。
- ・九州帝国大学工学部造船工学科卒。（S18年）
- ・藤永田造船所技師。KK啓林館企画室長。高校講師。KK啓伸取締役。等を歴任。数学教育コンサルタント。
- 【主な著】
 - 算数を強くする法 三星書房刊
 - 数学のつまずき発見法（数式編）
 - 数学のつまずき発見法（図形編）
 - その他多数。
- ・昭和四十二年羽曳野川柳会に初出席。
- ・川村好郎先生の指導を受ける。
- ・四十四年川柳塔社同人に推される。
- ・四十六年西尾菜先生を主宰に菜の花句会結成。
- ・五十三年「路郎賞」を受く。
- ・川柳塔社常任理事・編集副部長・川柳塔賞選考委員。

川柳句集 **光背**

定価 2,000円・送料300円

昭和59年2月7日・初版発行

著者 **香川 酔々**

〒639-02 奈良県北葛城郡上牧町上牧3517
電話 07457(6)7821番

発行所 **川柳塔社**

〒545 大阪市阿倍野区三明町2-10-16
ウエムラ第2ビル202号室
電話 06(629)6914番

版下 **三宅写真植字社**

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

©1984





景
印